

Library Mate

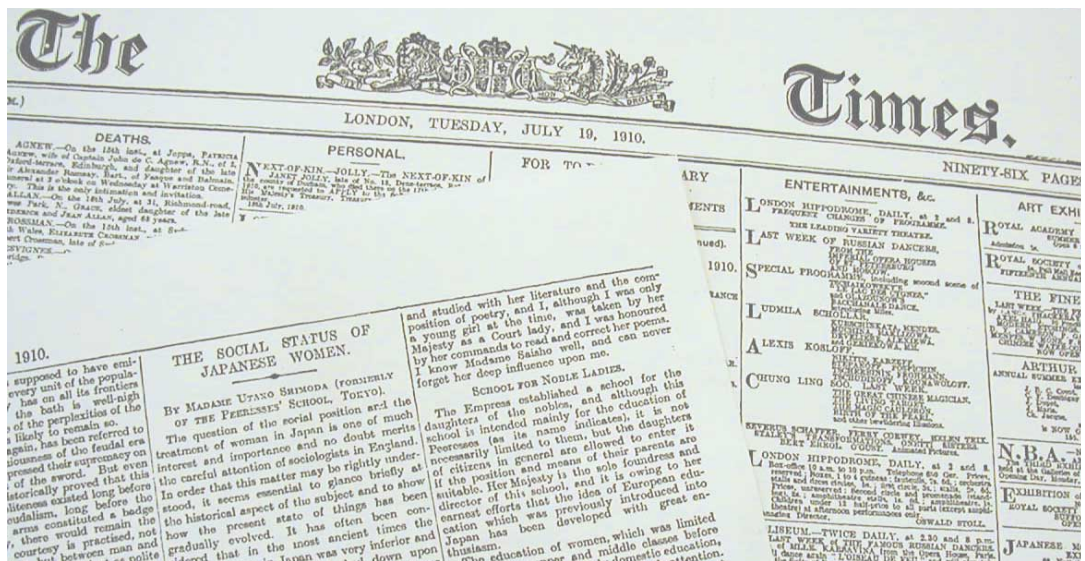
特集 下田歌子

“ The Social Status of Japanese Women ”

大学 英文学科 教授 大 関 啓 子

1910年(明治43年)7月19日付英国の高級紙『タイムズ』に、ある日本人によって“ The Social Status of Japanese Women ”の見出しで、かなり長い英文が寄稿されている。署名は、Madame Utako Shimoda。学祖、下田歌子である。日本における女性の地位と処遇を、『古事記』にまでさかのぼり、足利時代から明治に至る歴史的背景を説明した上で、明治末期の女性の社会的状況を簡潔な英文でまとめている。

この中で下田は、特に日本における女子教育の向上を中心に、“ The Peeresses ’ School ”(華族女学校)と“ Jissen Jogakko ”(実践女学校)の特徴を述べている。当時の実践は、創立10年を経て3学科800名を超える生徒が在籍し、その名の示す通りあくまでも“ practical ”な女学校であること、そし



てその中には100名を越す清国からの女子留学生が含まれ、母国に帰り教師になる志を抱いて学んでいる事が強調されている。

この記事の15年前、1895年5月9日付『タイムズ』に、既に下田歌子の名が見える。前日5月8日にバッキンガム宮殿において、ヴィクトリア女王に謁見した者の名簿「Drawing Room」に、“Shimoda Mme., Imperial Palace, Tokio”と記されているのである。この時下田はおよそ2年間ロンドンを拠点に、ヨーロッパ諸国における女子教育視察を行っていたのである。1893年(明治26年)9月10日、横浜を発った当初の目的は、明治天皇の2人の内親王の皇女教育のための視察であった。下田はこの時満39歳、華族女学校学監を勤めていたが、まだ海外へ出た経験はなかった。病身の父を日本に残し、華族女学校と桃天塾の留守中の事情を心にかけて、シナ海、インド洋、紅海を経て、地中海へと抜ける40日余りの航海を続け、マルセイユに至り、パリへと入る。この長旅は下田に、途中東南アジアや中東諸国の事情を垣間見せ、世界の中の日本の情勢を深く考えさせる事になった。12月上旬拠点となるロンドンに到着、ここを中心に王室と上流社会の家庭教育を調査し、そこでの母親の権力の強さに注目し、洋の東西を問わず、また身分の上下にかかわらず、母親の役割の大切さを再認識する。また日本と比較してヨーロッパの女性は、知識・意志の強さ・活発な行動力、そして男性の助力によって与えられる可能性の広さなどでは、はるかに勝っている事に気づき、しかもそれは与えられた教育と習慣の違いから生じるものであると考え、あらためて教育の重要性を確認している。

古来ヨーロッパにおいても、女性は男性より精神的にも道徳的にも劣った不完全な存在とい



下田歌子(1902年頃)

う見方があり、一般の多くの女性たちは学問を学ぶことを否定され、その知的教養は、あくまでも男性との話のつり合いを保ち、交際に便利な手段としてしか考えない時代が続いていた。18世紀のパブリック・スクールの教育や、ヴィクトリア朝のガヴァネスたちによる家庭教育などにも、様々な問題点があった。しかし1848年ロンドンのクィーンズ・コレッジの開設によりその卒業生達が、英国中に理性ある真の女子教育の道を切り開いていく。その動きはやがてオックスフォード・ケンブリッジ両大学における女性の高等教育をも実現させていくのである。下田の滞欧時期とその訪問校の

数々は、まさにその核心であった。ここで当初の滞在期間をさらに延長し、一般庶民の女子教育へと積極的に目を向けていく。英国内だけでなくフランス・ベルギー・ドイツ・イタリア・スイスと、帰路はアメリカへも回り、女子教育視察を行い、教育方針・カリキュラムの他、校内の衛生や食事に至るまで詳細に観察している。

下田は帰国後、華族女学校の学監に復職し、帝国婦人協会の結成を経て、その教育部門として1899年(明治32年)実践女学校を開設する。この折、ヨーロッパで視察した実利主義を「勉めて現今の社会に適応すべき実学を教授」するために、その学科課程内容に可能な限り取り入れ、しかもあくまでも「泰西女子教育の風を直訳的に写し」たものではなく、当時の日本の状況に合うよう十分に配慮している。

冒頭の寄稿には、ヨーロッパにおける女子教育の実状を見極め、その真髄を持ち帰り、明治の現状に合うよう十分な配慮のもと、日本の女子教育に生かし、見事にその実を結ばせた下田歌子の自信が窺える。

発掘!! 下田歌子 in New York Times

アメリカの二大新聞の一つ、「ニューヨークタイムズ」でも下田先生関係の記事が掲載されている。

時あたかも第一次世界大戦勃発直後のこと。日本の有力政治家、銀行員、ビジネスマン、作家、教育者及び外交官35人がアメリカに対する親善メッセージをまとめた英文図書を出版したことを、1914年10月4日付けのニューヨークタイムズが“Japan's Friendly Message to the United States”のタイトルのもと第41面で伝えた。

出版された図書の執筆者35人には、当時の首相・大隈重信、明治の大実業家・渋沢栄一、護憲運動の尾崎行雄、英学者・神田乃武と、歴史上の偉人が名を連ねる中、学祖・下田歌子は唯一の女性として1章“ The Virtues of Japanese Womanhood ”を寄稿している。

当時、日米とも扇情主義者、強硬外交論者や扇情的ジャーナリストが幅をきかせ、アメリカの日本に対する「黄色い危機」論、日本では「アメリカの侵略」論が台頭してきていた。本書出版の目的は、日本政府がアメリカに対し親睦の姿勢を示すことで、アメリカ及び日米両国民を安心させることにある、と新聞は伝えている。

新聞紙上の下田先生紹介部分

Mme. Shimoda is the one woman who contributes a chapter in the message to America. As already stated, she is Japan's leading woman educator, and is the author of many standard Japanese books on matters pertaining to education. Her chapter is a tribute to Japanese womanhood. She refers to a visit, many years ago, which she made to the United States, in the course of which she stood before Washington's tomb at Mount Vernon. Washington is her hero.

新聞紙上で紹介された図書は日米両国で出版された。しかし、両版は微妙に異なり、絹製本の日本版書名は“Japan's Message to America”で出版社の記載がない。布製本のアメリカ版書名は“Japan to America”となっており、出版社はG.P. Putnamで、日米友好関係の促進と日本の価値ある知識普及のために設立された（ニューヨーク）日本協会理事の序文が掲載されている。下田論文は、日本版が肖像付で209～214ページ、アメリカ版は187～192ページにそれぞれ掲載されている。両版とも、下田記念資料室（次ページ参照）に保管されているので、利用したい方はカウンターにご相談下さい。



新聞と紹介された図書の日米両版。新聞紙上には下田先生の肖像が見える

下田歌子記念資料室



学園の創立者下田歌子関係の資料約4,800点を収蔵している資料室です。資料はおもに和歌を中心とした文学関係の資料と書簡類、本学を中心とした教育関係資料(学園史)、下田歌子の父(平尾録蔵)、祖父(東條琴台)、曾祖父(平尾他山)の平尾氏父祖三代の著作・文書記録です。

この下田歌子関係資料は昭和44年頃には約1,000点程度でしたが、その後、本学図書館司書

山口典子氏が精力的に収集、整理した結果、約3,200点の資料が収集されました。そして昭和55年3月に学園創立八十周年記念出版『下田歌子関係資料総目録』として刊行され、平成11年には学園創立百周年記念としてインターネットの本学図書館ホームページ(<http://www.jissen.ac.jp/library/>)に『下田歌子電子図書館』として公開されています。この公開によって、最近では香港の博物館から、清国留学生部(本学が明治期に中国からの留学生を受け入れていた学部)関係資料の貸出依頼が来たり、明治神宮より皇室関係資料の貸出依頼を受けたりしています。昨年は、学内より学園設立母体である「帝国婦人協会設立趣意書および設立賛助寄付名簿」が発見されました。また同窓生より下田先生自筆の昭和10年頃の試験問題が寄贈されています。

在学生、同窓生で、学祖の資料、学園関係の資料をお持ちの方は、是非ご協力をお願いします。

ミニ展示「ワイルド直筆書簡展」

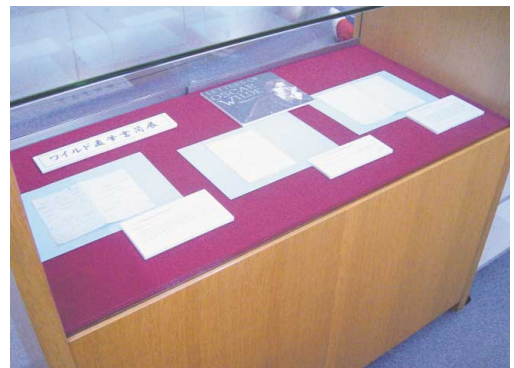
昨年10月に、オスカー・ワイルドの直筆の手紙一通を入手できたこともあり、以前から当館に所蔵する2通と合わせて計3通でミニ展示を1月13日から行った。

展示したワイルドの手紙は、イギリス人画家 Mortimer Menpes 宛(1886年12月頃)、ジャーナリストの Carlos Blacker 宛(1898年5月6 or 7日)、及びアルフレッド・テイラーの友人 Charles Spurrier Mason 宛の以上3通である。うち2通は、ワイルド書簡の集大成である Rupert Hart-Davis とワイルドの孫に当たる Merlin Holland が編集した The Complete Letters of Oscar Wilde (H. Holt, 2000) には収録されていない貴重なものである。(余談であるが、編者の Merlin Holland に手紙の写しを提供したところ、「オスカー・スタイルの興味深い手紙」であるとの回答があったことを報告しておく)

展示は、1月から大学図書館、3月からは短大図書館と都合2回行ったが、展示を熱心に見

入る利用者の姿が目立った。また、学校訪問で訪れた父母からも好評を得た。

実は、ワイルドの誕生日は1854年(10月16日)であり、奇しくも学祖・下田歌子(1854年8月8日)と同じ生誕150年に当たる。生誕150年を祝って欧米で記念イベントが行われており、当館でも初版本の展示等を計画している。乞うご期待。





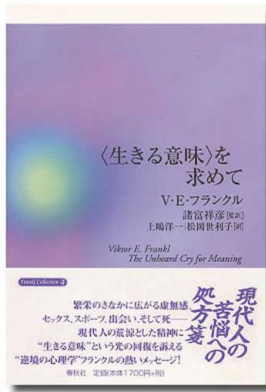
学生に薦める本

<生きる意味>を求めて

V・E・フランクフル著 諸富祥彦「監訳」

2003 6 (第6刷発行) 春秋社

(大学図書館所蔵 146 8 F83)



この書物は、生身の体験者の立場に立って「内側から見た」強制収容所の記録『夜と霧』の著者 V・E・フランクフルが、1978年に刊行した書物の邦訳です。20数年も前のものとはとても思えない、鋭い問題意識で日本の今日的な

課題に迫っていて、さすがだなあと感銘を受けます。

私たちの今日の生活は、豊富な商品やブランド商品に囲まれ、電化製品・電気機器の普及等で近代化された便利な生活です。私たちが住んでいる社会が、今どこに向かって進んでいるのか、世界では今何が起こっており、どんな時代でどこへ向かっているのかをあまり意識しなくても、したがってまた、今何をしなければならないのか、何をすればいいのかと考え込まなくても、なんとなく暮らしていている生活だと、言えそうです。

このように、大変恵まれた、一見何不自由ない生活を送っているが、しかしながら、私たちの大方は「自分の人生にどこことなくむなしさの感情をいだいたり、自分の人生が無意味に思えてならない」時が、その頻度こそ違え、よくあるのではないのでしょうか？

フランクフルによれば、今日の社会はほとんどすべての、ありとあらゆる欲望を満たし、また楽しませてくれているが、ただ一つ、生きる意味への欲求だけは例外だ、そして、このような無意味感、むなしさの感情は世界的な規模で広がっている問題で、この問題解明の取り組みの中に、私たちの時代の多くの不幸を説明してく

れる何かがあるのだ、と。

本書は、私たちが、自分の生活の中に「人生の意味を発見する」ための“目から鱗”的な“発想の転換”や“ヒント”の山であると私は読むことができました。本書に皆さんを誘うために、フランクフルのいくつかのそうした“言説”を記します。

「人は常に生きる意味を探し求めている、いつも意味の探求に向かっているのである。」「人間は自分を駆り立てる衝動や本能のままに生きるのか、あるいは自分を引き付ける理由や意味に向かって生きるのかを決断する、そういう存在なのである。」

彼のつぎの議論にも注意を向けておきたいです。

「どこにでもいる普通の人たちから私たちが学ぶものは、『人間であるということは、チャンスでもありチャレンジでもある状況にいつも向かい合うことだ』ということである。人生のそれぞれの状況は私たちに、その意味を満たすようにチャレンジしてくる。そしてその挑戦を引き受けることによって初めて、自己を実現するチャンスが、私たちに与えられるのである。つまり、人生のどの状況も、私たちに呼びかけてくる一つの呼び声である。私たちはこの呼び声にまず耳を傾け、そしてそれに応えるのである」と。

このように記してみますと、フランクフルの考えは、真の人生の意味は、世界のうちに発見されるべきものであって、自分自身の心の中に見出せるものではないということ、また、自分の人生の意味はまさにその人によって充たされねばならず、またその人だけが充たすことができるのもだということになります。

この書物だけでなく、フランクフルの書物は、あなたがあなたの人生の意味を“発見するその場所とその発見の仕方”とに、180度の転換を引き起こすかもしれません。是非、一度手にとって読んでみてください。

大学 人間社会学科 教授

長尾 演 雄

近隣図書館紹介

～第2回 日野市の新・多摩平図書館

日野市立多摩平図書館（以下、図書館）は4月1日にオープンしたできたてほやほやの図書館。今年3月末までは大学から歩いて数分の所にあったので移転は残念だったが、さっそく見学してきた。

図書館は多摩平の公団住宅内にあり、5つの複合公共施設から成る「多摩平の森ふれあい館」(以下ふれあい館)の1階にある。ふれあい館は「子供から高齢者まで、様々な利用者が集い、コミュニティが形成される場所」というコンセプトの基、図書館はその一翼を担う。

総ガラス張りになっている「ふれあい館」の外観から受けるイメージは森の自然と建物の調



和だろうか。入館すると抜群の採光と多くの照明設備により、明るくクリーンなイメージを受けた。

現在の蔵書数は、一般図書4万冊、児童図書2万冊の合計6万冊（最大収容能力は8万冊）。開館直後とあって、書架は所々空きが目立ち、利用者に「蔵書が少ない」というイメージを持たせてしまうようだが、時間が経てばこの問題は解消されるだろう。

図書館全体にバリアフリーが徹底されており床には段差はない。書架間は車椅子が楽に通れる間隔で、点字ブロックも用意されている。また、障害者のための「対面朗読室」も設けられており、様々な利用者のためのコミュニティに恥じないものとなっている。

一般用調べ物コーナーとは別に、「児童調べ物コーナー」があるのはもともと児童図書館を母体とするならでは。5月から始まった「おは

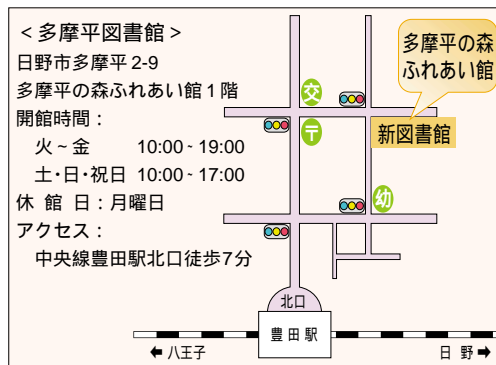


なし会」用の部屋もあり、その部屋は床暖仕様となっている。

面白いのは、建物一番の売りとしている「ブラウジングスペース」。ここは特に採光が良く、新聞や雑誌などをゆったりと静かに読むことができるようになっている。閉館後は、図書館側に仕切りできることで独立した部屋になり、21時まで別の入口から利用することができる。

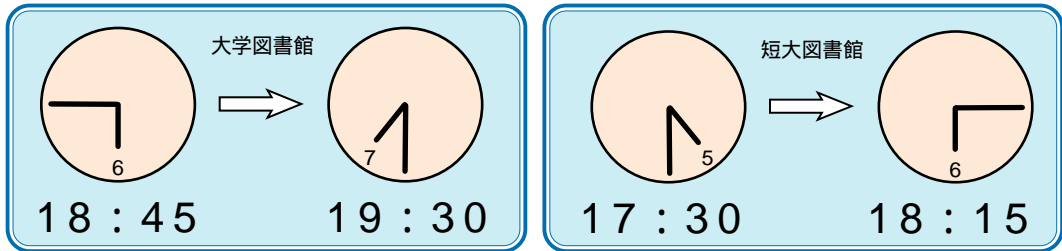
4月1日にオープンしてから約1ヶ月。市民や利用者からの評判はなかなか好評とのことで、貸出総数は約2万1千冊以上を数え、4月の土・日曜日の1日平均貸出冊数は1,200～1,300冊になるという。立地の良さから利用者登録は増加傾向にあり、新たな利用者層の開拓も進んでいると思われる。また、先号でも書いたとおり、日野市立図書館はインターネットで予約をかけた蔵書を、どの図書館からも借りることができるが、多摩平図書館は受取館として650回指定された、という。

豊田駅北口から歩いておよそ7分。3階ラウンジにはカフェもあり、是非一度訪れてみてはいかがでしょうか。（取材日：2004年4月28日）



Library Mail

開館時間延長のお知らせ ~さらなるサービスの向上を目指して~



図書館では、皆さんからの要望を受けて4月より開館時間の延長をいたしました。平日の開館時間を、大学は19:30まで、短大は18:15まで延長しました。これは、今年1年の利用状況をみての試験運用でもあります。今後正式なものとするかは、皆さんの利用次第ですので、おおいに図書館を利用させていただきたいと思っています。

『館員の横顔』

異動になり1年8ヶ月図書館を離れ、この4月に復帰いたしました。図書館の朝は返却本の配架と書庫整理から始まります。書庫に入ることは、どんな資料が利用されているのか把握すること等大事な仕事です。カウンター業務のローテーションもあり、ペースを取り戻すのにただいまりハビリ中ですと言っています。

情報化が進み図書館の在りようも変化し、サービスも多様化していますが、日常業務を確実に日々積み重ねることがサービスの向上にもつながると思っています。

こんな私が思い出したように、手に取る本があります。「101人のかみさま」灰谷健次郎編著(理論社 1985刊)です。児童詩「きりん」に関係し、児童詩教育の実践家でもある灰谷さんの処女作「せんせいけらいになれ」という本を中心に文化放送から語りかけた45回が、小さな本になりました。大らかでユーモラスで思わず吹き出してしまうような子どもたちの語録で、開いた後はとても元気になれる1冊です。

谷合 美千子



みなさんの図書館との出会いはいつ、どんな風でしたか？覚えていますか？

私には保育園に通う子どもがいます。我が子にとって「図書館」とは近所の公立図書館を意味します。母である私の利用に付添うことで図書館と出会い、やがてお話会に参加するという形で利用を始めました。現在は保育園から散歩を兼ねて、先生やクラスメートと月2~3回通っています。目移りするほどたくさん本がある「としょかん」は憧れの場所で、図書館へ行った日には嬉しそうに報告があります。先日、どんな本を借りたのか聞いてみると、家にある絵本ではありませんか！家でいつでも読める本をどうしてわざわざ借りたのだろう...とその本を選んだ理由を問うと、保育園に居るときにも読みたい1冊とのこと。そんな利用の仕方もあるんだなぁと思った瞬間です。

この4月から図書館で働くようになって思うこと。私の学生時代と比べて長くなった図書館の開館時間中、絶え間なく来館し、熱心に勉強している学生さんが多いということです。みなさんはどんな思いで図書館を利用しているのでしょうか。ふと、聞いてみたくなるときがあります。

川島 恵子

※※いんふお-め-しょん※※

2004年7月～2004年11月

大学図書館

開館時間

通常：月～金 8:50～19:30

土 8:50～16:00

試験期：(7/1～7/29)

月～金 8:50～19:30

土 8:50～18:00

夏休み期間：(7/30～9/20)

月～金 9:00～16:00 土曜閉館

休館日

書庫整理日：7/30、10/5、12/7

夏休み期間：毎週土曜日、8/9(月)～8/18(水)

試験期の貸出

7/1(木)～7/24(土) 3日間貸出

対象者：大学生、短大生

夏休み特別貸出

期間：7/26(月)～9/13(月)

冊数：無制限

返却日：9/27(月)

卒論作成者のための特別貸出

対象：博士論文・修士論文作成者
卒業論文作成者(全ての学科)

受付期間：10/1(金)～11/11(木)

貸出期間：貸出日から30日間

冊数：無制限

特別貸出対象資料は、大学図書館の図書のみです。

指定図書・雑誌は通常貸出です。

8/13～8/18は図書館貴重書庫の燻蒸作業のため大学本館内への立入りできません。

常磐祭のため11/13(金)～15(月)は閉館です。

詳細や変更は掲示等でお知らせします。

短期大学図書館

開館時間

通常：月～金 9:00～18:15

土 9:00～16:00

夏休み期間：(7/30～9/20)

月～金 9:00～16:00 土曜閉館

休館日

書庫整理日：10/6、11/10

夏休み期間：毎週土曜日

8/4(水)～8/31(火)は、夏期休業及び蔵書点検のため休館。

試験期の貸出

7/1(木)～7/24(土) 3日間貸出

対象者：大学生、短大生

夏休み特別貸出

期間：7/26(月)～

冊数：図書 無制限

7/26(月)～9/10(金)

AV資料 6点

7/26(月)～9/17(金)

指定図書 3冊

7/26(月)～9/21(火)

返却日：9/24(金)

雑誌は通常貸出です。

編集後記

4月から人間社会学部が新しく開設されました。これに伴い、大学図書館では春休み中に社会科学分野を中心に図書の入替を行い書架をリフレッシュしました。

今後さらに充実した図書館を目指し努力していきます。

Library Mate 第32号 2004年7月

発行所 実践女子大学図書館
東京都日野市大坂上4-1-1
URL:<http://www.jissen.ac.jp/library/>
実践女子短期大学図書館
東京都日野市神明1-13-1
URL:<http://www.jissen.ac.jp/library/jcol/>

発行責任者 日 浅 和 枝